

氏 名 張 文 博

学 位 の 種 類 博士 (学術)

学 位 授 与 年 月 日 令和6年9月23日

学 位 論 文 名 開かれた住宅の空間構成と住み方に関する研究

論文審査委員 主査 中野 茂夫 (教授)

副査 小池 志保子 (教授)

副査 小伊藤 亜希子 (教授)

論文内容の要旨

職住分離と同時に普及した近代家族のマイホームとしての現代住宅の計画は、外に対して閉じる傾向があり、住まいと地域のつながりの希薄化にもつながった。そうした中で近年注目されるのが、開かれた空間をもつ住宅である。居住者の自己表現の場として住宅を開く新たな「職住一体」の動きに加えて、地域交流を主な目的として、専用住宅の一部を開く動向もみられる。このような新たなライフスタイルに対し、生活のプライバシーを確保しつつ住宅を開くために、住宅計画がどのように対応するかが課題となっている。

本研究では、家族以外の不特定多数の人が利用できる開かれた空間を持つ住宅を「開かれた住宅」として分析対象とする。アクセス経路や両空間の接続関係等に着目し、開かれた空間と居住専用空間の関係を調整する空間構成手法を解明すること、また居住者の住生活と開かれた空間で生まれた近隣交流の実態から、空間構成手法の効果を検証することを目的とした。

本研究は6章で構成される。

第1章では、研究の背景、目的、方法、位置付けを示し、本研究で取り扱う開かれた住宅の定義とそれに関連する概念を整理した。

第2章と第3章では、『新建築住宅特集』に掲載された開かれた住宅を調査対象とし、住宅を開くことと家族生活のプライバシーとの矛盾に住宅計画がどのように対応するかに主眼をおき、開かれた空間と居住専用空間の関係を分析した。

第2章では、道路からの4つのアクセス経路型 ([a]入口分離型、[b]内部接続型、[c]入口動線共用型、[d]入口共用型) を軸に、開かれた空間と居住専用空間の隣接関係、開かれた空間の時間差利用の2つの指標を加えて、代表的な5つの空間構成類型を抽出し、これらが用途ごとの来訪者の範囲に応じて、開かれた空間と居住専用空間の関係を調整していることを示した。

第3章では、開かれた空間の主な機能をもつ主室と居住専用空間の間に配置され、両者を繋ぐ「接続空間」の存在に着目した。接続空間は、土間やピロティ、中庭、室などの空間形態をとり、開かれた空間と居住専用空間の内部接続部、あるいは入口への動線部に使われていることを確認した。さらに、開かれた空間の主室、居住専用空間、接続空間それぞれへの道路からのアクセス経路、三者の配置関係、視線の透過性の3つの指標により、代表的な10の接続空間の空間構成タイプを抽出して分析し、接続空間の多くが道路からのアクセス経路として来訪者に住宅を開きつつ、開かれた空間の用途に応じて開かれた空間の主室と居住専用空間の関係を調整する重要な役割を担っていることを示

した。

第4章と第5章では、事例の訪問調査により、開かれた空間で生まれる来訪者との交流を含めた具体的な居住者の住み方と住生活評価に迫ることを試みた。

第4章では、新築の開かれた住宅を対象として、居住者、設計者のインタビューを行った。生活空間のプライバシーを確保しつつ、開かれた空間と居住専用空間を便利に行き来できるようにしたいという共通する住要求（設計要望）があることが明らかになった。これらの住要求に対し、[b]内部接続型、及び[c]入口動線共用型の事例では、多様な接続空間が開かれた空間と居住専用空間を緩衝するとともに、土間や軒下空間などが接続空間として来訪者を招き入れるために重要な役割を果たしていた。一方、[d]入口共用型の調査事例には接続空間はなく、床レベル差や室内の複数動線など、それに代わる設計手法でプライバシーを確保し、合わせて両領域の時間差利用によって空間を効率的に使う住み方を確認した。また地域交流は、居住者の住宅を開く意図、実際の住み方の両方から確認され、開かれた空間は、持続的な交流に発展する場となっていた。

第5章では、アクセス経路型[d]に該当する大阪長屋が、改修によって開かれた住宅として活用されていることに注目した。長屋に特徴的な伝統的空間要素である土間、続き間、庭が用途に応じた改修を経て開かれた空間として生かされ、空間の時間差利用や兼用、及び来訪者の限定や予約制等の住み方や運用によって開かれた空間の開放の仕方を調整し、開かれた住宅として有効に活用されていることを示した。また、長屋では近所の人を中心に非常に密な交流が行われ、長屋を開くことを通じて生まれた交流が、地域とのつながりを強める持続的な交流にも発展していることを明らかにした。

第6章では、以上の分析結果を総括して結論とするとともに、今後の課題を述べた。

本研究で得られた知見は以下に整理される。

- ・開かれた住宅は、4つのアクセス経路型（[a]入口分離型、[b]内部接続型、[c]入口動線共用型、[d]入口共用型）を軸に、代表する5つの空間構成類型で構成されており、これらの手法を適応することで、現代の開かれた住宅の用途に応じて開かれた空間と居住専用空間の関係を調整することが可能である。

- ・[b]内部接続型と、[c]入口動線共用型を中心とした多くの事例で、開かれた空間の主室と居住専用空間の間に配置される「接続空間」が存在している。接続空間の配置は、居住専用空間との関係を調整しプライバシーを確保すると同時に、道路からのアクセス空間を兼ね、住宅を開くことに大きく貢献する空間構成手法であることを示した。

- ・[d]入口共用型を代表する大阪長屋は、接続空間の配置が少ないが、改修によりその特徴的な空間要素が生かされ、空間の時間差利用や兼用によって、限られた空間を有効に利用し、開かれた空間と居住専用空間を緩やかに繋げる空間構成手法で、地域の人を中心に開く住宅として有効に活用されている。

- ・住宅を開くことは来訪者との交流を生んでおり、その一部は持続的な交流にも発展し、地域コミュニティ再生に資する可能性を持っている。

論文審査結果の要旨

以上、本研究は、住宅を開こうとする居住者の住要求に応える建築計画の指針を提示し、新しい住まいのかたちへの展望に資するものとして、高く評価することができる。慎重に審査を行った結果、本審査委員会は、申請論文が博士（学術）の学位の授与に値するものと認めた。